

NHKの磯村尚徳氏と上智大学教授の渡辺昇一氏との対談の中に、知的生活について語りあっている中に次のような言葉があった。「文は人なり」という言葉も使われているが、プリヤ・サパラン『美食礼讃』の「君の食べているものを言いたまえ、君の人柄を当ててみせよう」の言葉にならって言えば、「君の蔵書を見せたまえ、君がいかなる人間か当ててみせよう」ということも言えると思えますね」と。

以前の乱読家を自ら認めていた頃にくらべると、随分貧弱な読書ぶりになってしまったけれど、それでも最近少しずつ本を読む意欲が自分の中に復活してきているのは嬉しい傾向だと思っている。新しく本棚に加わった数冊の背表紙を見ながら、私の読んだ本をみてどんな人間か当てるといふ人があるなら、最近の読書の傾向を何と評さ

れるのだろうか、ふと自分自身で問うてみたりもするのであった。

最近読んだ数冊の書物の中から、何をこにとりあげようかと思ひ迷ったが、幼児の教育に志を持っている者であっても、読書の内容は夫々であるのがその人間の特性でもあると思つて、幼児教育に直接つながりはないけれども底に流れているものとして考えさせられるものをあげてみた。

母のための教育学

●小原国芳著

●玉川大学出版部

最近、小原国芳氏の講話をうかがう機会があつて、教育に非常な情熱を持っておら

れるのを知った。固苦しい理論でなく、実にわかりやすく自分の信条とするところを学生や親たちに話される。聞く者は、新しい世代の者も、一つ世代をへだてた者も、共通して何か心うたれる思いがするのは、本當の教育者としての魂を持って語られるからなのだろう。著書も随分数多くあるようだが、まだ残念ながらあまり多くは読んでいないけれど、『母のための教育学』は学生のための教科書として使われているだけに、その講話と同じように自分の信念を明確に、しかも平易な文章で述べてあるところがうれしい。以前私が学生だった頃手にしていた教育学の専門書は、最後まで読むのにかんがりの忍耐を強要されるものが多かっただけに、易しく、しかも肝要なことははっきりと語つてあるところが小原氏の「文は人なり」の現われなのである。

全人教育を信条として、なかならず女子

が、母として、人間として、子女の教育の大切さを自覚することの重要性を若い世代に心をもつて述べてある。今後も、小原氏の著書を一冊ずつ味わっていききたいと思っている。

しろばんば

●井上 靖著

●新潮社

こんな題名が突然出て来たりおかしいだろうか。でも私は少年期を主題にしたものを読むのがとりわけ好きである。『しろばんば』については、附属中学の卒業式の日、校長から生徒へのはなむけの言葉の中で、少年の心の成長について語られたので、未だ読んでいないことを恥しながら早

速手にした。これは主人公洪作少年の五歳から中学受験までの生いたちを美しい洗練された文体の中でつづった小説である。これは小説化されているけれど多分に自伝的なものがあり込まれていると感じさせられるところがあるが、それだけにこの洪作の生いたちは、今都会で育っている近隣社会とのつながりに乏しく、知識ばかり先行している多くの少年たちの生活とくらべてみて、宝石のように尊く感じられた。まだ幼児期とも言えるほんの幼ない時代から、少年が成長するにつれて体験的に受けとめる人間関係や社会の出来事、そうした中で次第に形成されていく少年期の美しい感受性が、きらきらと輝きながら私の胸に響いてくるのであった。

少年期を扱ったこんなに素晴らしいものに出あえたことがうれしかったと同時に、私の身近の子どもたちにも、二度とは通れない少年期にできるだけいろいろな体験を

味わわせてあげたいという思いが湧いて来たらなかった。

ぼくは十二歳

●岡 真史著

●筑摩書房

おしまいに岡真史君という少年の遺稿集にふれたい。それは別れも告げずに行ってしまった十二歳の少年の詩集である。この少年の母親の岡百合子さんは附属高校時代親しかった同級生の間柄である。両親の愛の中でいつまでも十二歳の少年として生き続ける真史君の書き残したものが、一冊の本として両親の手でまとめられた。その中から一編の詩をのせたい。

無題

にんげん

あられずりのほうが

そんをする

すべすべ

してた方がよい

でもそれじゃ

この世の中

ぜんぜん

よくならない

この世の中に

自由なんて

あるだろうか

ひとつも

ありはしない

てめえだけで

かんがえろ

それが

じゆうなんだよ

かえしてよ

大人たち

なにをだって

きまつてるだろう

自分を

かえして

おねがいだよ

きれいごとでは

すまされない

こともある

まるくおさまらない

ことがある

そういう時

もうだめだと思ったら

自分じしんに

まけることになる

心のしゅうぜんに

いちばんいいのは

自分じしんを

ちようこくすることだ

あられずりに

あられずりに……

先にふれた『母のための教育学』の中に
幼稚園教育について、次のような一節があ
った。「幼稚園の教育で大事なことはケチ
ケチ小さく仕込まないこと。やがて、大人
になった時、最も大きな正しい人間になり
得るように荒削りにしておいてほしい」と。
ここにはからずも、少年の心と教育者
の心との一致を見つけて驚くのだった。